

# 成 人 吃 音 者 の 一 处 遇 例

—治す努力を否定して—

伊 藤 伸 二  
いとう しんじ

大阪教育大学紀要 第24巻 第IV部門 第1号

昭和50年（1975）

別 刷

## 成人吃音者の一処遇例

—治す努力を否定して—

伊藤伸二

(聴覚・言語障害児教育教室)

(昭和50年4月30日 受付)

吃音のため自由な行動がとれずにいる成人吃音者（23才・男子）に、吃音を治す努力の否定の立場に立った処遇プログラムを設定した。吃音を持ったままでいかに目的を達成するかの実践を6ヶ月間継続した。当初、吃ることを避ける従来の行動パターンを変えられずにいた吃音者が、6ヶ月間の行動の中で吃りながらも目的を達成できるようになり、また身体的にも健康になって来ている。現在では、職場と家庭とにかなりよく適応している成人吃音者の報告である。

### I はじめに

吃音問題の歴史が「治す」ことを前提にしていたことは、拙著『日本における吃音問題の歴史—I』で述べた。そして、治っていない成人吃音者が多い事実を前提として、成人吃音者の団体が「治す努力の否定」の立場をとり始めたことも紹介をした。

「吃音を治す」ことを看板にしている民間矯正所に何度も訪れ、結局は治らずに悩みを深めてしまう吃音者は多い。今から報告する事例でも、矯正所をしばしば訪れ、治す努力を続けてきたが、遂に悩みを深めこそそれ、問題解決にはなっていなかった。

吃音が治らなければ、吃音者の悩みは解決しないのか？ 吃音を持ったまま、吃音をいかしてよりよく生きる道はないのか？

この質問を直接ある吃音者になげかけ、吃音を治す努力をするのではなく吃音を持ったまま素直に生きる生き方をともに考えた。

### II 事例の概要

N・Y 23才 男子 図書館勤務

吃音歴を、本人の話、日記、手記等の引用でなるべく直接見こととする。『』の部分が原文のままの引用である。

家族は、Nが4才の頃Nの吃音に気付いた。しかし、本人が吃音を意識し始めたのは、小学校5年生の頃であった。その頃に、母親につれられて吃音の矯正所に通った。また吃音の悩みが深刻になった高校一年生の時、3週間程毎日矯正所に通った。そこで、呼吸練習、発声練習とともに、「吃音は必ず治る、必ず治すんだという強い意志を持って」と精神

的な面での指導も受けた。その結果は、

『習った話し方が特殊なものでしたので、矯正所の中ではやれても、矯正所外では実行できませんでした。また、吃音は必ず治ると教えられたため、治すことへのあこがれは、以前にもまして非常に強いものとなりました。その結果吃ってはいけない、吃ることは悪いことだという強迫観念ができあがり、それ以来ますます吃ることを恐れるようになりました。そして、吃ることもずっと重くなったようです。不思議なことにその頃から、言おうとすると舌が出るようになりました。その後は、この舌に随分悩まされました。』

高校三年、大学三年生の時も、それぞれ違った矯正所で訓練を受けたが全く効果が無かった。大学時代は、サッカー部に所属をしていたものの、それに熱中することもなく、勉学に打ち込むこともなく、毎日を漫然と過していた。つまり、生活全ての面で消極的になっていた。卒業、就職を控え、急に将来が不安になってきた。何度か就職試験を受けたが全て失敗に終り、ますます不安が大きく、気分も暗くなり、一日中家に閉じこもる日が続いた。幸い、三月末になってやっと知人の紹介で現在の図書館への勤務が決った。しかし、社会に出て、以前から不安を抱いていた実際の生活の場で、吃ることによって話せなくなり、Nの悩みは更に深刻なものとなった。

『就職した当初は、先輩の保護のもとで、話すこともほとんどなく仕事ができました。しかし、8ヶ月目にもなると、いつまでも逃げている訳にいかず、話さなければならない事態が度々起ってきました。吃って嫌な思いをすることが多くなってきたのです。学生時代ですと、逃げようと思えばいつでも逃げられたのですが、仕事ですのでいつまでもそうしている訳にもいかず、段々と追いつめられてきました。』

Nは次のような悩みを手紙で寄せ、その後相談に来た。

『——前文略す——私の吃音はいわゆる難発で、いったん言葉がつまると、しばらく出なくなるというものです。そしてそれだけならいいのですが、どうしても言おうとすると舌が出てしまうという奇妙なものなのです。これは心理的に不安定な状態から脱出しようとする転位行動であるというふうに説明できると思いますが、少しの時間言葉が出ないくらいで、恐慌状態に陥るという精神力の弱さにこそ問題があると思われます。ですから少しでも多く話し、人前でも動じないように極力努めております。けれどもなかなか消極的な態度が改まらず、自分で自分に愛相がつきることがしばしばです。——後文略す——』

### III 面接の経過

#### 1) 面接の方針

初回面接時の言語行動の状態は、話し始めがひどい難発で、吃る度に舌が出る随伴症状が見られた。吃って話すことばの間隔は長く、Nが話すそのままを聞き手が無理なく書きとめられる程度であった。

面接は昭和48年11月23日から始まり、毎週1回約2時間で約6ヶ月間継続した。その後1ヶ月に1度程近況の報告に来ている。担当したのは筆者と助手の吃音者（大阪教育大学

研究生) であった。

第1回の面接では次の悩みが出された。

『職場は図書館で、私の仕事は新着図書の整理ですので、普段はほとんど話さずに仕事ができます。しかし、時には来館者との応待や上司への報告があります。そのような時は、人前で吃るのが恥しく、話すことを最初からあきらめ、その場から逃げ出します。つまり、何かと理由をつけては、先輩に代ってもらっていたのです。しかし、いつまでも逃げている訳にいかず困りはじめました。この状態から早く脱け出したいと思うのですが、いざ実行となるとしりごみをしてしまいます。』

Nのこの訴えをもとに今後の方針を次のように立てた。

- 消極的になっている自分の行動のパターンを知る。
- 吃音を治す努力はせず、これまでの行動のパターンを変える工夫をする。
- 吃音を持ったまま目的を達成することに集中する。

上記三項目については、特に職場で実践していく。

一般的に吃音者は、吃音のためだと言って消極的な生活に甘んじがちである。困難な場に直面すると、「吃音さえなければ」と考えてしまう。つまり吃音に意識が集中するあまり、目的達成への努力がおろそかになり遂には目的達成すらあきらめてしまう。

また、自分が消極的な行動しかとれないと漠然とは分っても、自分の行動のパターンを把握し、問題点を探し出すことはできていない。

吃音者の問題は、吃る、吃らないの問題ではない。吃るのを恐れ、積極的な行動がとりたくてもとらないところにある。たとえ吃っていても、自分のしたいこと、しなくてはならないことができていれば、吃音者の問題のほとんどは解決したと言えよう。幸い、Nがこの考えに賛意を表したので、前述の方針が確認された。

## 2) 自分の行動のパターンを知る

消極的になっている自分の行動パターンを知ることを目的として、Nが自分で考え、工夫し、行動しなければ達成できない課題を面接のたびに筆者が出していった。

面接のほとんどの時間は、その行動についての報告のディスカッションに用いられた。

4回目の面接時には、ディスカッションの時録音したテープを自宅で聞き、KJ法(川喜田二郎著『発想法』中公新書)でまとめる課題を出した。

ところが、次の週、Nは課題を果さず面接を受けに来た。そして、なぜ課題を果さなかつたのかの筆者の質問にNは次のように答えた。

『テープが少し聞きとりにくく圧倒されました。それにKJ法を完成させるための材料がなく、買ってまでする意欲がなくなっていました。大きな紙(模造紙)がどこに売っているのか分らなかったのです。またやり始めると大変な作業に思え、最初からこのような大変な作業を完成させると課題を出した人も期待していないだろうと考えました。』

買物のわざらわしさがNに課題達成の意欲をなくさせたと言えよう。そこで、普段の買物の様子なども聞いていった。

買物は大体母親にしてもらい、自分で買うのは、自分で見

つけ出し、差し出すだけですむものに限られている。その他、理髪店へ行って注文がつけられずに気にいらない刈り方でがまんすること、食堂では食べたいものがあっても言い易いカレーライスしか食べないことが出された。また伝言をたのまれても、吃るのがいやさに伝言をしなかった話など、日常の行動全般にわたって話がすすめられた。

この時の話し合いをテーマにして、KJ法でまとめるようNに再度課題を出した。このテーマとの取り組みの中で、Nは自分の消極的行動のパターンを知ることができた。すなわち、少しでも障害があると、不安が大きくなり、委縮してしまい目的達成を断念してしまうこと、そしてできなかったことや、しなかったことを自分の都合のよいように解釈し、自分をごまかしていたことを理解した。自分が気づかないうちに吃音に甘えてしまっていたことに気付いたのである。

### 3) 吃音を持ったまま目的を達成する

Nは自分が消極的になつたり、目的を達成しないことを吃音のせいにしていること、また、それが吃る以上に問題であることに気づいた。そこで今後は次のことを守って行動することを筆者と約束した。

- 吃ったか、吃らなかつたかに注意を向けるのではなく、いかに目的を達成するかに注意を向ける。
- あることができない時、決して吃音を言い訳の道具にしない。

以上の事を確認しつつ我々は次のステップ、つまり、より幅広く行動しなければ達成できない課題へ入っていった。

——趣味を広げるために、腹話術をマスターしよう。その為に必要な情報は自分の手で集めよう。そして4ヶ月後の成人吃音者の集会の時に発表しよう——

この課題とのとり組みの中でNは従来の行動パターンを少しづつ変えていった。なお、この腹話術マスターの課題は、Nの舌の問題を解決する糸口をつかむ目的をも持っていた。舌を出しては話せない腹話術を趣味として練習し、結果として舌を出さずに話す工夫をさせた。本人にはその意図は全く伝えず、ただ趣味を広げるためにと練習をすすめた。

最初の頃は

『最初どうしてよいか分らず困りました。勧め先の図書館で、腹話術に関する本、雑誌はないか、またサークルの紹介はないかと調べましたがありませんでした。近くの本屋で本を搜しましたがありませんでした。』

これが一週間のNの行動の全てであった。自分のまわりの情報源だけをたよったこと、本屋へ行っても尋ねるだけの積極さがないことを筆者らが指摘し、Nの次の週の行動に期待をかけた。

『プロの腹話術師が近くにいるらしいとの情報を得たので、長い時間かかりましたが家を捜し出しました。住所をメモし、手紙を書きました。その返事はまだきていません。』

この行動が従来の行動と全く変わっていないことにNは気づかないでいた。すなわち、電話をかけたり、人に尋ねたりすることをせず、いたずらに時間をかけて捜し出すことは、

Nの従来の行動そのものであるた。

何故もっと別の行動がとれたかったかの質問に、Nは電話をかけて住所を知ることも気付いていた、また直接尋ねようとも考えたが、吃るのが恐ろしくて、時間がかかっても自分で捜そうと決意したと自分の行動を説明した。

その後ある人から雑誌の中のサークル紹介記事の中に腹話術があるという情報の提供を受け、Nは行動せざるを得なくなってきた。

『それには電話番号しか書いていなかったので今度こそ電話をしなければなりません。私は追いつめられました。過去自分で電話をかけたのは2回程しかありません。吃るのは目に見えています。逃げ出したい気持を押えて、受話器を取りました。相手の声が聞えると、準備したことも役に立たず、吃って、吃って話すことになりました。そして受話器を置いた時は体が汗でびっしょりになっていました。しかし苦しみながらもなんとか目的を達することができました。

以前なら吃りながら話した後は、とても恥しい気持になるのですが、この時はそれを感じませんでした。それよりも、目的を達成したことでホッとした思いでした。』

この電話をきっかけに、Nは目的達成のために行動をしようとする意欲がでてきた。書店で欲しい本について尋ねたり、青年館や労働会館へ直接でかけて尋ねたり、関西腹話術連盟にも足を運び、腹話術マスターの目的に向って行動するようになってきた。そのことをNは、

『いろいろな行動を重ねていくうちに、行動している際の精神面での変化に気づきました。人前で話すことや、電話をする時の、何とも言えぬ恐さと、話し終った後の穴にでも入りたい恥しさが、少しづつなくなっていきました。おこらく、行動している内に吃ることよりも目的の方へ注意が向き、吃ることは目的達成のための障害にならないことが分ってきたからだと思います。』

と述べている。

その後Nは腹話術用の人形も自分で工夫して作り腹話術の練習を開始した。プロの腹話術師の家を訪れ、直接指導も受けた。昭和49年5月初旬、200名の成人吃音者の前で、腹話術の説明をし、実際に演じた。吃りながらも最後まで予定の行動ができたことでNは大きな自信を得たようだ。

### III 現在のNの状態

面接を開始して約1年半が過ぎた。その後のNの職場での様子、家庭での様子を知るために筆者はNの職場と家庭を訪れた。職場の上司、同僚、母親の話は次のようにあった。

#### 1) 職場の上司一事務長一の話

昭和49年4月からNの上司になったため、以前の状態と比較はできないがと前おきし、現在のNの勤務ぶりを話してくれた。

『同僚と話している時は、それ程ではないが、来館者との応対、電話ではかなり吃って

いるようだ。しかし、仕事熱心で責任ある仕事がまかせられる。職場会議にも積極的に参加し、意見があれば発言している。普段あまり話さなくてもすむ職場である関係かも知れないが、仕事には全く吃ることは障害となっていない。最近は仕事がおもしろくなっているようだ。最初は、Nにどのように接すればよいか分らなかつたため、今はあまり話すことのない整理係をしてもらっている。しかし、来年度は来館者との応対の多い閲覧係にまわってもらうことも考えている。職場の者とスキーやハイキングによく行っているようだし普段の職場での人間関係もよいようだ。』

事務長の話では、吃りながらも仕事から逃げることなく楽しく仕事をしているようである。筆者が出した課題達成の時の行動パターンが職場で応用、実践されているようだ。

## 2) 同僚—Sさん（女性）一の話

『Nさんが職場に来られて三ヶ月程は私たちと全く話すことはありませんでした。最初の頃名前が言えず、まっ赤になって立っているだけの状態だったのを憶えています。電話を最初の一年間は全くとらなかつたようです。来館者との応待でNさんがひどく吃り本人も来館者も困っている時は、みんなで代ってあげていました。楽しく仕事ができるようにと職場の者（6名）でができるだけ親しく話かけたり、ハイキングに誘ったりしましたが、応じることはあまりなかつたようです。ところが就職して2年目に入ってから職場の者が驚く程積極的になってきました。電話も自分で取れるようになったし、職場会議でも発言するようになりました。来館者との応対を以前のように代ってあげることは最近は全くなくなりました。吃りながらも積極的に用を足しているようです。』

以前は吃ることを非常に気にしているのが私たちにも分りどう接してよいか困りました。しかし最近は自分から吃りのことを話すようになったため私たちもNさんの吃りのことを気にしないですむようになりました。また舌が出る時は目のやり場に困りました。本人も見られるのが嫌なのか舌が出はじめると必ず手で隠していました。ところが今は舌が出ることも少なくなつたし、出ても手で隠すことがなくなりました。私以外の同僚も以前よりNさんと接しやすくなつたと喜んでいます。ハイキング・スキーに私たちが誘つても喜んで参加するようになり、普段でも職場で冗談を言うようになりました。私とは帰りのバスがいっしょなので、仕事の話、音楽の話をよくします。議論になることもありますが、決して負けずに議論をしてきます。自分の得意な音楽の話をしている時は特に楽しそうにまた調子よく話をします。』

同僚はNの変化に驚きを見せていました、また今後のNの問題としては、少しまじめすぎることをあげた。

上司と同僚の話から、職場で吃りながらも責任果し、同僚ともスキー旅行などを楽しみ職場に十分適応しているようだ。面接当初の職場での仕事をすすめるにあたつての不安や悩みは解消されつつあると筆者は確信した。

## 3) 母親の話

母親はNの吃音をなんとか治したいといろいろな矯正所に何度も一緒にについていくなど

の努力をしてきた。それがかえって悪い結果となったことに責任を感じている。Nが大学を卒業してからも、就職先が決らなかった時は、Nが社会に出て本当に働けるようになれるだろうか心配であった。幸い就職ができた時は、ほっとすると同時に、今度はいつ職場をやめるか、吃るために仕事ができずにいつやめさせられることになるか心配になったと言う。そのような経過をへてNは就職三年目を迎えた。ここに一年間の変化を次のようにまとめている。

- 以前は胃がいたいなどと体調の悪さをよく訴えることがあった。体も非常にやせていたが最近は体重が5kgも増えすっかり健康になった。
- 仕事に責任をもたされ、意欲が出てきたようだ。家で職場の話をするようになったし、時々家へ仕事を持ち帰ってしているようだ。以前には全くなかったことだ。
- 同僚や、大学時代の友人とつき合うことが多くなってきた。ハイキング、スキーなどで家をよくあけるようになった。
- 以前は父親とほとんど話すことはなかったが、最近は話題が合いはじめたかよく話すようになった。
- これまで「衣類はどんなものでもよいから買って来て」という本人の要望で全て私が買っていた。しかし最近はおしゃれをし始め、全て自分で買うようになった。
- 大学時代、また就職してからの一年間は全くお金を使わなかった。ところが、最近はおしゃれや、遊びにお金を使えようになった。

職場でも、また日常の生活でも楽しく過しているようだと喜び、今は全く心配がなくなったと母親はしめくくった。

## V 考察とまとめ

Nについて、吃音歴、面接の経過、最近の状態をなるべく直接本人の話や手記、職場の人の話などで見てきた。

Nに対して筆者は吃音を治す試みを一切せず、また舌の問題も、趣味としての腹話術の練習で考えたにすぎなかった。吃音そのものよりNの行動のパターンを本人の目的に沿って変えることに焦点を合わせてきた。吃音が治らなければ吃音者の悩みは解決しないか？吃音を持ったまま吃音をいかしてよりよく生きる道はないか？の質問にこの事例が答えてくれていると思う。

この事例を通して筆者が学びつつあることを以下に記し、今後の問題としたい。

吃音者の処遇はそのまま吃音児に生かせよう。基本は全く同じである。職場を学級に、職場の上司を学級担任に、同僚を同級生に置きかえれば、そのまま、このNの事例は、吃音児の処遇に結びつく。筆者は、Nとの面接の過程の中で職場を訪れ、上司や同僚とまた家族と話しをしなかった。幸い上司、同僚に理解があったため、Nは行動のパターンを職場ででも変えることができた。しかし、職場が冷たい雰囲気であり、Nを排除するような職場であつたら、面接でいくら筆者が課題を与え、それをNが達成してきたとしても、その経験を職場で生かすことはむずかしかったであろう。筆者のうかつさを今、反省している。吃音児（者）の指導にあたっては、学級（職場）への配慮がきわめて重要であることを今さらながらに感じている。

Nの吃音は、現在も治っていない。しかし職場、家庭によく適応しているNは、吃音の問題を解決しつつあると筆者は考えている。

なお、筆者が考察そしてふれたかったことは、本人の記述や職場、家族の方々の談話の中（『』の部分）に盛りこまれている、ご参照いただきたい。

最後に、この事例をまとめるにあたり、日記、手記を提供し、また職部訪問の労をとつて下さったN氏、心よく話し合いに応じて下さった職場の方やご家族に謝意を表したい。

また本稿をご校閲下さった、筆者の所属する聴覚・言語障害児教育教室主任、内須川洸教授に感謝する。

### 参考文献

伊藤伸二：「日本における吃音問題の歴史—I—」 大阪教育大学紀要 第23巻、IV、131  
ページ (1974)。

### A Report on One Adult Stutterer's Case

Shinji Ito

(Department of Special Education)

One adult stutterer, 23 year old libraian, was treated from the view-point of denying the effort to correct his stuttering speech. Stuttering therapy with stuttering was planned and done for about six months. During this period, his behavior pattern was gradually changed and at the end of period he finally mastered the way to reach his goal with his stuttering. At the same time his physical and mental health was also improved in his home and library. Future problems to be solved are described.